

# 經濟論叢

第七十七卷 第五號

---

リカアドウの經濟學體系……………岸本誠二郎（1）

新中國における人民幣デノミネーション  
について……………三木毅（29）

マルクス＝エンゲルスのイギリス革命論(1)……………尾崎芳治（45）

ゲオルク・ルカーチ「若きマルクスの  
哲學的發展について（1840—1844年）」……………平井俊彦（62）

---

〔昭和三十一年五月〕

京都大學經濟學會

# マルクス・エンゲルスのイギリス革命論(一)

尾崎芳治

## 一 イギリス革命をどう評價するか

周知のとおり、マルクスもエンゲルスも、完結したイギリス革命の歴史をかかなかつた。それは、一八四四年のエンゲルスの論文『イギリスの状態』(マルクス・エンゲルス選集―以下選集と略す―第五卷所収)から、一八九五年エンゲルスの死の直前にかかれた論文『フランスにおける階級闘争への序文』(選集第五卷所収)にいたる、かれらの活動の全期間にまたがるあれこれの論文の一部をなしているにすぎない。したがって、わたしの課題は、かかれた目的も時期もさまざまなかこれらの記述から、イギリス革命にたいするマルクス・エンゲルスの見解を貫くいくつかの傾向的なものを見だし、それをできるかぎり忠實に紹介することである。

註 マルクス・エンゲルスのイギリス革命論を扱つたものとしては、クリストファー・ヒル『マルクス・エンゲルスのイギリス内戦論』(C. Hill, *The English Civil War Interpreted By Marx and Engels, Science & Society, Vol. XII, No. 1*)がある。本稿をまとめるうえで多くの示唆をえたことをお断りしておく。

マルクス以前のイギリス革命研究は、二つの系列を基軸にしていた。その一は、ヒュームの『イングランド史』(Hume, *History of England, London, 1802, Vol. I*)に代表される、革命否定のトリーイ的見解、その二

は、バートンの『議會日誌』(Th. Burton, *Parliamentary Diary*, London, 1828)、フォクスターの『共和制時代の政治家達の生涯』(Forster, *Lives of the Statesmen of the Commonwealth*, 1836—39)、およびフーリーの諸著作(Macaulay, *Essay on Milton*, 1824. do, *Essay on Hampden*, 1831. do, *History of England*, 1848. etc.)に代表される、「議會派」の革命性を強調するホイッグ的見解である。一九世紀初頭が、國際的には、「神聖同盟を中心として徒黨を組んだ諸政府および封建主義者たちと、ブルジョアジーによって指導された國民大衆との間の軋轢」(『資本論』—長谷部譯第一卷七八頁)に象徴されるブルジョア急進主義勃興の時代であり、イギリスでは、穀物法をめぐる「産業資本と貴族的土地所有との闘争」(前掲書七八頁)のかけに、資本と労働との間の階級闘争が依然としてめだたないでいた、いわば、イギリス・ブルジョアジーの最後の樂天時代をなしたという事情は、十八世紀を通じての正當の見解であつたトリーイの見解にたいする、ホイッグ的見解の優位を決定した。この時期は、「偉大な議會派」が國民的英雄として復活させられた時代である。だがそのかぎり、一八四八年の革命、とりわけ、パリの六月蜂起のもつた意義は決定的であつた。それは、プロレタリア革命の可能性を實踐的に提起することによつて、ホイッグ的見解の政治的地盤ブルジョア急進主義の破産を決定づけた。いまや「私心のない研究の代りに欲得づくの論難攻撃があらわれ、とらわれない科學的研究の代りに心やましく意圖あしき論辯が現われた」(前掲書七九頁)。經濟學におけるリカード理論が、四八年革命をへて、ミルの折衷論へとたどつた同じ俗流化の過程(前書七九頁参照)は、革命史研究にあつては、ガーディナーの『イングラランド史』(S. R. Gardiner, *History of England*, 1863—91)による、「議會的英雄」の「清教徒的英雄」への衣がえとなつてあらわれた。それは、階級闘争を宗教的ヴェールによつて覆いかくすことによつて、その後の革命史研究の發展にぬぐいきれない影響を及ぼすことと

なる。

ところで、革命史研究の系列におけるこの轉換は、マルクス、エンゲルスのイギリス革命論と對照的な關連をもっている。一般に、近代の革命が、ブルジョア革命として、客觀的な歴史的評價をうけとるためには、ブルジョア社會そのものが歴史的・客觀的に批判されるまでに成熟してきて、それに固有な矛盾が歴史的な矛盾として意識されることが必要だとすれば、ほかならぬ一八四八年の革命が、すでに『共產黨宣言』に表現されていた近代社會揚棄の世界觀に、實踐的な確認を與えることによって、マルクス、エンゲルスの近代革命史觀が、その初發から、ブルジョア革命としての評價のうえにたつことを保證したのである。したがつて、マルクス、エンゲルスの思想がブルジョア急進主義崩壞の前夜に形成され、その崩壞の經驗、すなわち、ドイツ三月革命の失敗とブルジョアジーの裏切りの體驗を経てのち、ほぼ一八五〇年前後に確立されたというとき、マコーレイ的見解(マルクス、エンゲルスにもつともしばしば引用されるイギリス革命史家は、マコーレイである)を基軸とし、四八年革命を劃期として、ガーディナーへの方向とマルクス、エンゲルスのイギリス革命論とが、いうまでもなく對照的な位置を占めることが理解できよう。後者は、古典經濟學にたいしてマルクス經濟理論の占める位置に似た、マコーレイ的見解の發展・揚棄の立場ともいえよう。われわれはこのことを、一八五〇年にマルクスが、ギゾーのイギリス革命論に與えた論評(Karl Marx, *A Review of Guizot's Book "Why has the English revolution been successful"*, Marx-Engels On Britain, Moscow 1953)に見ることができよう。かして、一八四四年を通じてフランス革命を研究した際には、マルクスは、ギゾーの著作からもつとも多くのものを學んだのであつた(F・メーリング『カール・マルクス』栗原譯一〇一頁参照)。しかし、いまや、ギゾーのイギリス革命論は、ブルジョア社會の「もつとも有能な人物でさえ、二月革

命の諸事件によつて、歴史學を全く理解できなくなるほどの混亂状態に陥し入れられたことを示す」(K. Marx, *ibid.*, P. 342) 見本となつた。ギゾーがイギリス革命の勝因を、その宗教的・保守的性格に求めるのに對し、マルクスはギゾーを恐怖させた「自由思想が外ならぬイギリスからフランスにもたらされた」こと、それが「宗教的」革命の所産であることを指摘し(*ibid.*, P. 344)、保守的なかぎりでは「フランス革命もイギリス革命同様なより以上に保守的に起つたこと」(*ibid.*, P. 344)を述べて、全體としてイギリス革命を、フランス革命と同様な、その先驅をなしたブルジョア革命として考察している。

ガーディナーの見解がイギリス革命の意義を抹殺したとき、マルクスとエンゲルスは、イギリス革命の世界史的意義を甦らせた。エンゲルスは、ビューリタニズムの背後にブルジョアジーを見出し、「イギリス史上のあの壯大な時代」(エンゲルス『史的唯物論』について—選集第十四卷六二頁)が、「ブルジョアジーの第二の大叛亂」(前掲書、六二頁)の時期であつたことを強調する。一五二五年のドイツ農民戦争は、第一の大叛亂であつたが、敗北に終ることによつて、「その後二百年の間ヨーロッパの政治的に活躍していた諸國民の列から除外」される運命をドイツに負わせることになつた(前掲書六一頁参照)。イギリス革命は、「スペインにたいするニードーランド人の叛亂を手本」(マルクス『ブルジョアジーと反革命』—選集第三卷三五四頁)としていたが、すでに十六世紀以來獲得してきた高い經濟的發展程度(エンゲルス『ドイツ農民戦争』—選集第十六卷三二五頁参照)と、とくに無敵艦隊擊破以後に確立した政治上、經濟上のヨーロッパ的地位のために、「その見本にくらべて、年代の點ばかりでなく内容においても一世紀だけ進歩していた」(マルクス『ブルジョアジーと反革命』—選集第三卷三五四頁)。イギリス革命はこの點で、「當時イギリス同様に、オランダを手本として共和國を樹立しようとしていたリスボンやナポリやメキシナのころみ」(不

Marr, *A Review of Guizot's Book, ...* p. 346) にくらべて、はるかに重要で決定的な意義をもっていた。それは「そっくりそのまま一七八九年のフランス革命の手本」(エンゲルス『イギリスの状態』選集補巻五、八九頁)となることによつてヨーロッパにブルジョア革命の時代を開き、近代ブルジョア社會の出発点をなしている。マルクスの次の言葉は、まさしくこの點を強調しているのである。

「一六四八年と一七八九年の革命は、けつしてイギリスの、またフランスの、革命ではなかつた。それらはヨーロッパ式革命だつたのである。それらの革命は、ふるい政治制度にたいしてなんらかの特定の社會階級がちえた勝利ではなかつた。それらは、あたらしいヨーロッパ社會のための政治制度を宣言したものであつた。それらの革命で勝利したのはブルジョアジーであつた。しかしながら當時にあつてはブルジョアジーの勝利とは、一つのあたらしい社會制度の勝利であつた。……一六四八年の革命は十六世紀にたいする十七世紀の革命であり、一七八九年の革命は十七世紀にたいする十八世紀の勝利であつた。これらの革命は、それが起つた世界部分、すなわちイギリスとかフランスとかの必要を表現する以上に、當時の世界の必要を表現していた」(マルクス『ブルジョアジーと反革命』—選集第三卷三五五頁)。

だが、イギリス革命の世界史的意義が強調されるとき、それはマルクス、エンゲルスにとつては、もつと多くのことを意味していた。マルクスは右の引用に續けて、「プロシヤの三月革命にはこうしたことにはなにか一つない」(前掲書三五五頁)とかがいてゐる。かれはここで、歴史がプロレタリア革命の實現を提起しているとき、なおブルジョア革命を闘わねばならなかつたドイツ革命の地方的、プロシヤ的な性格との對比を念頭においていたのである。それは、はるかに發達したプロレタリアートにより、プロレタリア革命の直接の序曲として闘わるべきはずであつたドイツ革命(『共産黨宣言』—選集第二卷五三二頁参照)と、運動の先頭にはブルジョアジーがたつており、「プ

ロ、レタリ、アートやブルジョア、アジ、以外の市民の諸層は、まだブルジョア、アジの利害と分離した利害をまったくもっていないかつたか、あるいはまだ独自の發達をとげた階級または階級部分をかたづけていなかったかそのどちらかであった(マルクス『ブルジョア、アジと反革命』—選集第三卷三五頁) 時代の革命との相違である。後者は(したがってイギリス革命もまた)階級としてのプロレタリートの未成立、—機械制大工業の未成立、—マニエファクチュア時代に起つた初期ブルジョア革命である。

ここで、注意しなければならないのは、マルクスが、プロレタリアートやブルジョア、アジ以外の市民の諸層(別の個所では、「人民」という言葉に一括されている)とブルジョア、アジとの利害の未分離を説きつつ、同時に、兩者を範疇的に峻別しているという點である。マルクスとエンゲルスは、この點にたびたびふれた。ブルジョア革命における「人民」とブルジョア、アジとのこの關係は、エンゲルスの晩年の一論文のなかで、「十七世紀のイギリス大革命よりはじまつた近代のあらゆる革命の特色」をなす「少数者と多数者」の指導と同盟、利用と裏切りの關係として定式化されている(エンゲルス『フランスにおける階級闘争への序文』)。ここでは、近代社會揚棄の時點における「プロレタリアート」が、それ自身、歴史的に豊富な内容規定をうけとる「人民」—多数者に具體化されている。「人民」の觀點は、マルクス、エンゲルスのイギリス革命論を貫く一すじの赤い糸である。この點でこそ、進歩的(議會的)なブルジョア、アジの觀點からしかみることができなかったマコーレイの見解を越えているのである。

マルクス、エンゲルスが、イギリス革命を、一般的には、封建的搾取にかわるブルジョアの搾取の確立、特殊的には、フランス革命とことなり、「革命前の制度が革命後にも打破されないでそのまま存続し、大地主と資本家とのあいだには妥協が成立した」(エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六六頁)ことに終つたと評價すると

き、「人民」の觀點が鋭く意識されているのである。

われわれは、次のようにいうことができる。マルクスとエンゲルスは、ガーディナーの見解と對立してイギリス革命の階級闘争（封建制生産様式對資本制生産様式）とその世界的意義を復活させ、マコーレイの見解に對立して、革命勢力内部の階級闘争（ブルジョア對「人民」）と革命のブルジョアの限界とを暴露したのであると。

以上がマルクス、エンゲルスのイギリス革命論の占める位置と、それとの關連からみたこれらのイギリス革命評價の概畧である。

## 二 革命における諸階級

### I 革命勢力

#### 自由主義的諸階級

マルクスは、イギリス革命における特殊な階級配置に注目した。それは、貴族が一括して敵にまわつたフランス革命とことなり、近代貴族とブルジョア、アジートの同盟が一つの陣營を形成し、王權、封建貴族および支配的教會を敵とした、という點である（マルクス『ブルジョアアジートと反革命』—選集第三卷三四頁參照）。この同盟の基礎は、新貴族の土地所有が「事實上決して、封建的でないブルジョアの所有であつた」（K. Marx, *A Review of Guizot's Book*, P. 347）ことに求められる。新貴族生成の問題は、今日ジェントリ論の對象とされているものであるが、マルクスとエンゲルスは、それを三つの契機から説明する。まづ、バラ戦争による舊封建大貴族の死滅が、それに代る新貴族勃興の外的條件を與えたこと。第二に、フランドルの羊毛工業の繁榮と羊毛價格の騰貴が、地代遞減の傾向に對

抗する土地所有の對應を、農民、追放を、楯の裏とする、牧羊圍込みのかたちで可能にし、新貴族を「貨幣を凡ゆる權力中の權力とする時代の兒」として生成せしめたこと。第三に、一五三九年—四九年の僧院領の沒收と賣却が、「多數の全身的または半身的成り上り者」をまじえて、一個の社會勢力としての「ブルジョア新地主」を成立せしめたこと、である。(マルクス『資本論』—長谷部譯第一卷一〇九八—九頁、一一〇二頁。エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六三頁參照)。ここで新貴族生成の基礎におかれているのは、レーニンが、マルクスによりつつ、土地所有が「革命的暴力的に」ブルジョア化されたが同時に、「地主のためになるように」地主的に強行されたと特徴づけたイギリスに特殊な土地所有のブルジョアの改造の過程(レーニン『一九〇五年から一九〇七年のロシア革命における社會民主黨の農業綱領』—レーニン全集第十三卷二二七頁參照)である。それは、いわば、「上からの道」のイギリス型ともいえよう。それは、革命的にブルジョア化される過程であった點ではプロシヤ型とことなるが、なおその主體が地主であつたかぎり、「上からの道」の一亜種である。マルクスが新貴族の土地所有を、フランスの封建的土地所有から區別して、ブルジョアの土地所有と呼ぶとき(K. Marx, *A Review of Guizot's Book*...; p. 347參照)、それは、こうした意味でブルジョア的なのである。マルクスとエンゲルスは、新貴族が基本的にどこから出てきたか、という問にはこたえていない。それは、むしろ、右のような過程で、「強欲な寵臣」や「投機的な借地農業者」や「都市ブルジョア」(マルクス『資本論』—長谷部譯第一卷一一〇二頁參照)などの雑多な階層から形成された、「ブルジョア的な傾向」をもつ地主層として、把握されている。そこでは、部分的に、人格的にも地主ブルジョアでありえたのである。したがつて、マルクスによれば、これらの社會層をまぜあわせて新貴族をつくりだしたヘンリー八世らしい、ブルジョアジーと新貴族の同盟は完成されていたのであり(K. Marx, *A Review of Guizot's Book*...; p. 347

參照)新貴族が、農民追放と土地集中とにより、「一方では、工業ブルジョアに對して、そのマニユファクチュア經營に必要な人口を用立て、他方、商工業の狀態に適應して、農業の發展をはかりうるようなブルジョアの所有」(K. marx ibid., p. 349)者であつたかぎり、フランス革命とことなり、イギリス革命にあつて、「大地主の一部が、經濟的ないし政治的理由から、金融および産業ブルジョアの指導者と協力したいと考へていた」(エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六三頁)のは當然のことであつた。

他方、新貴族と同盟していたブルジョアにとつて、當時最大の關心事は、「自由競争の貫徹と、……發展した工業にとつて桎梏となつていた領主權、同業組合、獨占などのような、いつさいの封建的所有關係の廢止」、總じて「所有問題」のブルジョアの解決にあつた(マルクス『道德的批判と批判的道德』—選集第二卷六五頁參照)。エンゲルスは、ブルジョアのこの要求を、かれらの前進の背後におこつていた「經濟狀態の變化」すなわち「マニユファクチュアにまですすんだ工業の發展、さらにまた商業の普及によつてたえず向上していつたかれらの經濟的、な權力手段」の増大から説明する(エンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷三〇四頁參照)。それは、「大規模な段階に達した商業が自由なさまたげられることなく活動しうる商品所有者を必要とし、工業のマニユファクチュアへのうつりゆきが、自由な労働者としてみづからの勞働力を貸貸するために工場主と契約を結ぶことがでる……一定數が現在することを前提する」という事情(前掲書二九八頁參照)である。一方、現實の「政治的秩序は、いたるところでギルド的束縛と特權とをそれに對立させており」「ブルジョアの競争者にとつて、機會は平等ではなかつた」(前掲書二九九頁)。マルクスとエンゲルスはここで、ブルジョアの要求を、一般的には、價值法則貫徹に根ざす經濟的自由の要求として、特殊的には、特權と獨占の廢止の要求としてとらへてゐる。ただし、マルクスは、特

權と獨占が、その初發から、ブルジョア勢力の利害と矛盾するものとしては理解していかない。むしろそれは、一定の時期にはじめて反對物としての性格を露呈することによって、一六世紀には王制によつて利用されえた議會(新貴族・ブルジョアジー)を、革命勢力の側に移行せしめたのであつた。マルクスが、「協同組合制度や統制的制度の保護のもとに、資本が集積し、海外貿易が發展し、植民地が創始された。しかしもし人がこの形態を固守し、その保護のもとに果實が熟するのをまとうとしたら、果實はすつかりうしなわれてしまつたであらう。そこで二つの雷鳴、一六四〇年と一六八八年の革命がおこつた」(『マルクスからアネンコフへ』—選集第一卷二六五頁)とかいた言葉は、このことをうらがきしている。

絶對王制と新貴族・ブルジョアジーの矛盾は、すでに革命にさきだつて、王制と議會のあつれきに表現されていた。獨占問題と租税問題がそれである。「所有問題がブルジョア階級の死活問題であつた」(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二卷六五頁)當時にあつて、絶對王制が、獨占をテコとして「イギリスの商工業をますます不能ならしめたところの自由競争にたいする直接的干渉」を強行しようとしたとき、それは、ブルジョア勢力を一層反王制の側においやつたのである。他方「租税の賦課と徴收の方法ならびに使用は、(ブルジョアジーにとっては引用者)その商工業にたいする影響からしても、またそれが絶對王制を絞殺するための金色の紐であることからしても死活問題であつた」(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二卷七四—七五頁)。ハンブデンによる船舶税の拒否は、「國王と人民のあいだのあらそいがすでに危険なまでの程度に昂じていることを示す一つの證明にすぎなかつた」(マルクス『公務執行妨害教唆罪による巡回裁判』—選集第四卷四〇五頁)とはいえ、ブルジョア勢力にとっては、その要求のもつとも尖鋭な政治的表現の一つであつた。

こうして、新貴族、ブルジョアジーの要求は、所有問題のブルジョアの解決を主眼とするブルジョア自由主義の實現であり、その主要な鬭争舞臺は、王制との取引と議會とに於つた。この勢力を代表していたのは、長老派と獨立派である。われわれは、兩派のちがひについては、のちにふれるだろう。

### 民主主義的諸階級

すでにふれたように、マルクスとエンゲルスは、「ブルジョアジー以外の諸層」に重大な關心を拂っている。マルクスによれば「人民は、國王にとつてはあらゆる政治的要素のなかでいちばん危険な要素である。……それはホップスのいわゆる『たくましい癖のわるい兒』であつて、やせた國王からもこえた國王からも、けつして愚弄されない」（マルクス『ライニッシャー・ベオバハター紙の共產主義』―選集第二卷一八一―九頁）最も革命的な要素である。

註 レーニンの次の言葉は、同様にここでもあてはまる。

「マルクスは『人民』についてかたつてゐる。しかし、われわれが知っているとおぼし、かれは『人民』が統一してゐるとか、『人民』の内部に階級鬭争がおこなわれてゐないとかいふ小ブルジョア的な幻想にたいして、つねにかしやくなくたつたのである。マルクスが『人民』ということばをつかつたのは、このことばで階級差別をぼかしたのではなく、革命を最後まで遂行する能力をもつ一定の諸要素を總括したのである」（レーニン『民主主義革命における社會民主黨の二つの戦術』―國民文庫版一六四頁）。

「人民」を構成するのは、小農民、プロレタリアおよび下層民（マルクス『ライニッシャー・ベオバハター紙の共產主義』―選集第二卷一八頁参照）であり、エンゲルスはそれを、「ヨーマンリと都市の平民的分子」（エンゲルス『史的唯物論について』―選集第十四卷六二頁）としてとらへてゐる。そこでは、ヨーマンは「中農」（前掲書六二頁）と呼ばれてゐる。マルクスもまた、「獨立自營農」としてのヨーマンについて語り、富裕な資本制借地農業者から區別して

する(マルクス『資本論』—長谷部譯第一卷一一〇四頁参照)。

註 マルクスとエンゲルスの記述に見えるかぎりで、十七世紀のヨーマンを位置づけるうえでの手がかりをえておきたい。

(一)『資本論』第一卷第二章と、第三卷第六篇とを對比すれば、十六世紀から十九世紀のあいだに、イギリス農村で起こった變化の出発點と終着點が與えられる。マルクスは、第一卷第二十四章第四節で、十六世紀に借地農業者が共同地の横奪などによりその家畜数を増加させ、しかも家畜飼養を土地耕作と有機的に關連させる、いわば農民による圍込みの姿をえがき(前掲書—長谷部譯第一卷一一三—頁参照)、同じ章の第二節では、農民を追放して羊をいれる、新貴族による圍込みについて語っている(前掲書—〇九八—九頁参照)。圍込みのこの二つの類型は、前者が、價格革命により、「自分の地主を犠牲にして自らを富裕にする」借地農業者生成のテコであり(前掲書—一三三頁参照)、後者が、こうした傾向に對抗して地主が、自らを牧羊業者にかえるか、もしくは、地代をつり上げることにより新地主として轉身する足がかりであった(エンゲルス『史的唯物論』—選集第十四卷六三頁参照)かぎり、十六世紀において、相對抗する「二つの道」の現實の矛盾を表現している。

(二)第三卷第六篇の資本制地代分析の實證的見本をなすのは、十九世紀イギリスの「三分制」である。それは、(a)ともかくにも地主の土地所有が近代的私有權として確認されていること、(b)そのうえに、借地農業者の資本制的經營が、地主との純粹にブルジョア的な利益の共生關係のうちに組み込まれていること、を前提としている。したがって、十六世紀における圍込みをめぐる地主と農民(富裕な借地農はその頂點をなした)の矛盾——それは、たとえばケットの亂に表現された——は十九世紀には、資本制地主と資本制借地農の共生關係のうちに解決されていた。イギリス革命は、こういうかたちで矛盾が解決されてゆく過程での一時點である。

(三)すでに、十六世紀末に資本制的借地農業者が階級として形成されていた(『資本論』—長谷部譯第一卷一一三三頁参照)。これと區別されたヨーマンは、十七世紀を通じて農村で多數者をなしていた(前掲書—一〇四頁参照)。一方、地主の土地所有はイギリス革命の結果、封建的名義しか有しなかった領地の近代的私有權の確認をうけて、農民からの土地收奪のより急激な過程を開始する(前掲書—一〇五—一〇七頁参照)。ところが、この過程では、大借地農が地主とともに、たとえば『共同地圍込み法案』をテコとした圍込みに参加している(前掲書—一〇七頁参照)。他方大多數のヨーマンのたどった運命は、この同じ過

程の結果、耕地と共同地をうばわれ、十八世紀半ばに消滅させられることであつた(前掲書一一〇五頁参照)。十八世紀における「資本農場」、十九世紀の三分制は、こうした、ヨーマン消滅のうえにきづかれた地主の大土地所有確立の結果であつたものである。

(例)したがって、われわれは次のようにいうことができる。すなわち、十七世紀前半にあつては、十六世紀の矛盾の地的解決がまだ完了しておらず、地主は、圍込みをおこない、十六世紀における下からの道の頂點であつた富裕な資本制借地農を自己の側にくり込みつつ、自らの土地私有権の確認をめざしており、ヨーマン(中農)は、農村の多数者として、それに對抗して、地主の圍込みに反對する下からの道の中核をなす、客觀的根據をもつような存在であつた。(なお、十六世紀イギリス農村の資本主義發展における「二つの道」については、堀江英一稿『ドップの經濟史學』—豊崎稔編『ドップ經濟學解説I』所收。大塚久雄稿『戸谷敏之氏の論文「イギリス・ヨーマンの研究」—戸谷敏之『イギリス・ヨーマンの研究』所收を参照されたい)。

都市平民の内容は、マルクスとエンゲルスにより、しばしば、「近代プロレタリアートの先驅者」という評價を與えられた(エンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷八八頁、マルクス『ブルジョアジーと反革命』—選集第三卷三五四頁参照)。それは、あの新貴族を生成せしめた同じ「人民大衆の暴力的收奪過程」によつて作り出された「無一物の」貧民(前掲書一一二二頁参照)と、「つねに都市手工業と家内の農村的副業とを廣大な背景」にもつマニエフアクチュアの従屬下におかれた都市の小手工業者(前掲書一二九一—四〇頁参照)とであり、後者は、一部は將來のブルジョアジー、大多數は事實上の賃労働者から成り、平民は、著しくプロレタリア的色彩の濃厚なかかるかたちでの小ブルとプロレタリアートの混合體であつた。全體としての「人民」すなわち、農民的・平民的同盟は、いわば、十七世紀における勞農同盟の歴史具體的であり方である。

エンゲルスは、イギリス革命における「人民」の革命のやり方にふれて、こうかいてゐる。

「都市のブルジョアがこの反亂を進行させ、地方の中農(自作農)が勝利をたたかいた。……とにかくこのあらそいが最

後の決戦までたたかひぬかれ、ついにチャールズ一世が斷頭臺にたつたといふことは、ひとえにこのヨーマンリと都市の平民的分子とが参加したからであつた。ブルジョア革命の戦果のうち當時すでに收獲に適當するまでに熟していたものだけをとりにれるためにさえ、革命はその目標をはるかにのりこえてすすめられる必要があつた。……これは實際、ブルジョア社會の發展法則の一つであるように思える。(『エンゲルス』『史的唯物論について』—選集第七四卷六二頁)。

エンゲルスはここで、共和制をかちとるまで徹底的に闘う、「革命的ゆきすぎ」こそ「人民」的なブルジョア革命のやり方であり、それを媒介にはじめて、革命の成果が確保されうることを、ブルジョア社會進化の法則に定式化してゐるのである。

「人民的ゆきすぎ」の典型的な例は、恐怖政治である。それは、「ブルジョアジーの敵である絶對主義や封建主義や素町人どもをかたづけける平民的なりかた」(マルクス『ブルジョアと反革命』—選集三五四頁)であり、「臆病で用心ぶかいブルジョアジーが何十年かかつて……完成できなかつたであらう」ような仕事を「民衆の血なまぐさい行動」によつて完成する手段であつた(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二卷六一頁参照)。だが同時に、この段階では、「人民」的ゆきすぎは恐怖政治は終局的な勝利をおさめることは、絶對に不可能であつた。それは「ブルジョアの生産方法の廢止を……必然ならしめる物質的諸條件がまだつくりだされていなかつた」(前掲書六一頁)からであり、プロレタリアートが階級として未形成で、自らの確固とした黨をもたず、農民をその黨のまわりに結集させるかわりに、プロレタリアートも農民もブルジョア黨に依存せざるをえなかつたからである(スターリン『ロシア共産黨の指導者および組織者としてのレーニン』—スターリン全集第四卷三四三—四頁参照)。この點は、勞農同盟の勝利が、プロレタリア革命への直接的轉化を保證しうる條件のできた最近のブルジョア革命とことなる、初期ブルジョア革命の基本的特徴である。

ともあれ、「人民」—農民・平民は、徹底的な封建制の一掃と民主主義すなわち共和制を要求して闘つていたのであり、その主要な闘争舞臺は、農民一揆と都市騷擾および軍隊にあつた。この勢力を代表していたのは、レヴェラーズである（ニンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷八八頁参照）。

註(一)イギリス革命は、フランス革命とことなり、完全な恐怖政治をしない獨自の弱さをもつていた。それは、この二つの革命を區別する土地問題の解決の仕方のちがいに關連している。マルクスはこの點に注目しているのであるが、われわれはのちにふれることにしよう。

(二)マルクスもエンゲルスも、ディッガーズ (True Levelers) については一言もふれていない。ここでは、レヴエラーズという名稱は、その他の左翼諸分派をも含めた意味で用いられていると解してよからう。(ちなみに、ディッガーズが発見、紹介されたのは今世紀初頭以後のことである—角山榮著『資本主義の成立過程』一五六頁参照)。

## II 反革命勢力

反革命勢力の中核をなしたのは、いうまでもなく、絶対王制である。「近代の歴史記述は、いかにして絶対三制が、舊封建的諸身分が没落し、中世的市民階級が近代ブルジョア階級にまで成長してはいるが、なお、たたかいつつある諸黨派の一つが他方を克服してはいなかった過渡的時代にあらわれるかを立證した」(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二卷七一頁)。「貴族と市民階級とがたがいに勢力伯仲した」(ニンゲルス『家族私有財産および國家の起源』—選集第十三卷四七六頁)この絶対王制成立の時期にあつては、チュードル家の課題は、大封建諸侯の力を弱め、その權力を自己の至高支配に集中することであつた。中央集權化は一般に、この時期にあつては、地方間の交換の發展、商品流通の漸次の増大、小さな地方諸市場の全國民的市場への集中の過程と照應していたのであり、この過程の主人公であつたものは商業資本家であつた(レーニン『人民の友とはなにか』—レーニン全集第一卷一四九頁参照)。

だからこそ「市民は商工業によって、一方では封建諸侯から金錢をまきあげ、その土地所有を手形に解消せしめ、他方ではかくして鎔地におい込まれた大土地諸侯にたいする絶対王制をたすけた」(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二巻六四頁)のであつた。マルクスは、この點を念頭において、絶対王制の「本來の開化的活動は中央集權化にあつた」(前掲書七三頁)とかいてゐる。このことは、テュードル家にたいして、新貴族・ブルジョアジーの勃興がもつた意義を解明する際の示唆を與えてくれるだらう。

しかし、絶対王制の階級の本質は、「封建的諸身分」と「市民」との單純な均衡のうゑにあつたのではない。むしろ、兩者のあいだの「鬭争全體をつうじて、政治的強力は貴族の味方をしたのである」(エンゲルス反デュリング論—選集第十四卷三〇四頁)。そして、絶対王制の成立期にみられたあの「一方の身分をおいつめるために、王權が市民階級を貴族にたいして利用した一時期は例外」(前掲書三〇四頁)をなしているにすぎない。すでにふれたように、十六世紀のおわり頃から、絶対王制と新貴族・ブルジョアジーとの矛盾は、次第に激しくなり、ステュアート朝に入るとともに一層その度を加えたのである。マルクスは次のようにかいてゐる。

「社會の物質的生活諸條件が大いに發展して、その公的政治形態の變化が社會にとつての死活的必要事となつた場合には、舊政治權力の全貌は變化する。そうなるを絶対王制は、中央集權化するかわりに、いまや地方分權化せんところをみる。封建的諸身分の敗退の結果として生まれ、またその解體にもっとも熱心に參加させしておきながら、いまやそれは、すくなくとも封建的差別の外観だけでも同執せんところをみる。商業と工業、同時にまた市民階級の擡頭を以前には國力ならびに自己の榮光の必要な諸條件として庇護しながら、いまや絶対王制は、すでに強力なブルジョアジーの手中にあつたえず危険な武器となつてゐる。工業をいたるところで阻止してゐる。それは、不安氣な、どんよりとしたまなざしを、その興隆の生誕地たる都市から、そのふ

る、勇敢な敵手の屍で地味のかえている農村にむけている」(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二卷七三頁)。

ロードーストラップフォード体制の採用は、まさしく、絶對王制のこうした本性に根ざしていたのである。一方で、  
の南工業興隆にともなう、ブルジョアジーの富の増大と、他方での財政危機の進行(前掲書六四頁参照)とは、王制をして、古い封建税の復活を含めての租税の増徴と、産業規制(獨占)とに走らせたのであり、そのいずれもが、  
すでにみたように、新貴族・ブルジョアジーを公然たる反王制にかりたてる結果しか生まなかつた。こうして、  
「政治的には、まだあいかわらず無力であった市民階級が、その増大してゆく經濟力によって危険なものとなりはじめた瞬間から、王權はふたたび貴族と同盟した。そのためにまずイギリスで……市民階級の革命が勃發した」  
(エンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷二〇四頁)のである。

マルクスは、イギリス革命にあつて、新貴族とことなる「舊貴族」が、存在したことを示唆している(マルクス『ブルジョアジーと反革命』—選集第三卷三四頁参照)。それは、「資本家的東南部」の多くの地方にすら、そして「封建的北西部」の全地方にわたつて存在した「新しい方法で白らの所領を利用するには、能力や資本や心意氣も、機會もともにもたないような地主」(C. Hill edited, *The English Revolution*, pp. 231-6 参照)を指すのであろう。  
だがマルクスは、それ以上にも述べていない。ともあれ、この舊貴族と國教會とは、王制の背後にあつて、王黨派とよばれた反革命勢力の中心をなしていたのである(マルクス前掲書三五四頁参照)。

以上でわれわれは、マルクス、エンゲルスにしたがつて、イギリス革命の革命勢力と反革命勢力とを見てきた。  
前者は、新貴族・ブルジョアジーと「人民」という(『ドイツ農民戰爭』におけるエンゲルスのことばを借れば)「二つの分派」から成り、後者は、絶對王制、舊貴族および國教會から成っていたのである。